

加齢とともに高頻度に認められる「白内障」 治療で用いる眼内レンズには高機能なものもあります

白内障とは、目の中で本来、透明である「水晶体」という部分が白く濁ってくる病気です。原因として最も多いのは、加齢によるもので、「加齢性白内障」と呼ばれています。誰しも年を取るとつれ、水晶体は濁ってきます。特に60歳以上になると、高頻度に認められ、年齢が進むとともに進行し、目がかすむ、ぼやけて見えにくい、物がだぶって見えるなどの症状が出てきます。

治療としては、初期であれば点眼薬で進行を若干遅らせることもできるといわれていますが、薬剤では、根本的な治療にはなりません。視力回復には、手術で「濁り」を取り除くことしか方

法がありません。

白内障の手術は、小さな切開創から濁った水晶体を超音波で砕いて取り出す「超音波水晶体乳化吸引術」という方法と、人工のレンズ(眼内レンズ)を挿入する手術を併せて行います。この手術後の見え方は、目の状態と手術時に挿入する眼内レンズの種類によって「見え方や見える範囲」に違いが出てきますから、手術前に相談し、ライフスタイルに合わせて挿入するようにしています。治療に用いる眼内レンズは高機能なものもあり、大きく分類すると2種類あります。一つは、「単焦点眼内レンズ」です。ピントが合う距離が1つで、遠くに合わせると近くが見えにくく、近くに合わせると遠くが見えにくくなる特徴があります。もう一つは「多焦点眼内レンズ」といい、ピントが合う距離が複数になり、手元から遠くまでおおむね見やすくなるため、メガネに依存する頻度を減らすことができます。



院長

三原 研一 先生

●プロフィール 高知大学卒、岡山大学眼科入局。糖尿病網膜症の研究で学位取得。川崎医科大学付属川崎病院副院長を経てみはら眼科開院

DATA

福山市神辺町新徳田2-309

☎084-960-5525

みはら眼科

検索

単焦点眼内レンズでの見え方。遠くにピントを合わせた場合のイメージ図



多焦点眼内レンズでの見え方。イメージ図



【セルフチェック項目】

- かすんで見える
- まぶしい
- 二重、三重に見える
- 眼鏡が合わない